
魔法少女リリカルなのは～魔王に愛されし少年～

TPPなんか恐くない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～魔王に愛されし少年～

【Zコード】

Z4950Y

【作者名】

TPPなんか恐くない

【あらすじ】

少年はこの平和な一時が続けば良いと思った、でもそれはある日を境に日常が非常へと変わってしまう。これはとある少女達が願いの叶うと言われる宝石を求めて戦う物語の裏側で始まつたもう一つの物語りである。

プロローグ（前書き）

ＴＰＰに参加して二次創作が消えるかもしれない？

だがあえて私は作品を投稿しようじゃないか！！

プロローグ

海鳴な街のある公園

まだ昼間だが、その公園のベンチに幼い一人の少年が座っていた
特になにをするでもなくボーッと空を眺めているだけ

毎日毎日、少年はベンチに座って暗くなるまで空を眺めていた
そんなある日、少年は砂場で一人で遊んでいる少女を見つけるの
でした

最初はなんとなく見ているだけだったけど時が経つにつれて少年は
少女のことが気になつてきたので話しかけてみることに

「ねえ、なに作ってるの？」

「ふえ？」

まさか自分に話しかけてくるだなんて思つていなかつたのだろうか、
少女は驚きながら少年を見上げた

「ねえ、なに作ってるの？」

「……別になにも

少女は顔を俯かせてそつ答える

「へえ、じゃあ僕と一緒にになにか作ろう?」

「私と一緒に?」

「うそ

「……本当になのほと一緒に遊ぶの?」

もう一度、肯定の領悾をするとなほとが乗った少女が突然泣き出しだしまった

「どうしたの! もしかして僕がなにかしちゃった!..」

「ううん……違うの、なんでもないの」

なんでもないはずがないと思いながらも少年はそれ以上はつてしま
なかつた

しばらく少女が泣き止むまで待つ

少女は泣き止むと笑顔でこりこりと笑顔で

「ああ、はやく遊ぼう!..」

やつぱりてきたのだった

その日から一人は毎日遊ぶよつになつた

そしてその日が全ての運命の物語の始まりだったとは、この時は知
る由もなかつた。

「ん……懐かしい夢だつたな」

朝の日差しで目を覚ました真紅の髪の少年

名前を鎧水仙^{やりみずせん}といつ

「ん、なのはお姉ちゃんからメールだ」

なのはといつのは一つ年上の幼なじみで先ほど夢で出てきた少女のことだ

仙は携帯を開いて内容を確認すると『おはよう』と二つ一言

あの朝が弱いなのはお姉ちゃんがこんな時間にメールを送つてくるだなんて今日が明日にでも嵐が来るのはないかと考えてしまつ

とつあえず『おはよう』とメールを返して着替え始める

着替え終わり、朝^{あさ}はんと思つたが両親が今日の朝早くから三泊四日^{さんぱくよ}の夫婦旅行に行つていることを忘れていた

小一の息子を一人残して旅行に行くとは如何に、と両親の放任
つぱりに呆れつゝ朝食のことを考える

「お、そうだ」

僕は急いでなのはお姉ちゃんに電話する

すると一メール以内にお姉ちゃんが電話に出た。

『もしもし、センpai..?』

「おはよー、なのはお姉ちゃん」

『おはよーなの..』

朝から元気が良い、本当に明日は嵐でもくる感じじゃないか?

「突然なんだかど、せつしこ、飯食べに行つていー?」

『構わないの..』

「こや、とつあえず桃子さんとかに聞くことにしておく」

『ふふふ、うつうつ待ってるの..』

電話の向こうから「お母さんーー」て声がする

それからじまじま、「なのはお姉ちゃんが戻ってきた。

『全然構わないって..』

「うふ、聞いてくれてありがとう。今からひかりに行くな
僕は通話を切って、学校の荷物を持つと早速、高町家に向つたので
あつた。

高町家は自宅から一分以内の「近所さん

昔から十郎さんとかひまお世話になつてゐるし、高町家のみんなとは
仲良しだ。

「遅いのセン君ー。」

「……いや、まだ電話してから五分も経つてないんだがビ〜。」

高町家に前には「立ちしてプリプリ怒つているお姉ちゃんが居た

「二ちゃん、それもそつなの。じゃあ早くお家に入ろ。」

僕の腕に抱きついて笑うお姉ちゃん

うむ、僕もお腹が空いたし早く入ろう。

「二ちゃんじゅんちゃん

出迎えてくれたのは高町家のボス、高町桃子さん

「お、仙君おはよつ

そしてリビングで優雅にコーヒーを飲んでいるのは高町家の大黒柱、

高町士郎

一人とも二人の子を持つ親とは思えぬほど若い

「桃子さんシローおはよー」

「よし、毎回言つているが桃子をせん付けで呼んでいるの」僕だけ呼び捨ての理由を聞かせてもらおうか」

「断固拒絶する」

キリッと言つ僕に何故か溜め息を吐くシロー

「仙、来ていたのか

「朝からなのはとくつこちやつてラブラブだね~」

振り返るとそこにはお姉ちゃんの兄の恭也と姉の美羽が居た

「むふふ~、そうでしょラブラブでしょ~」

嬉しそうにくつこけてくるのはお姉ちゃん

愛されているみたいです

「ははは、ラブラブなのは良いが早く朝食を食べよつか」

「はーい」

「の平和な一時

僕はいつまでもこの平和な一時が続くよう願っています

プロローグ（後書き）

第一幕（前書き）

さて……相変わらずの駄文ですがお付き合いください

主人公の戦う時の構え方が表現しにくいので想像が出来ずに気にな
る方は「玖錠^{くじょう}降神流^{じゅうじんりゅう}」で検索を

では本編をどうぞ

第一幕

あれから朝食を食べ終えて、学校へ向かうバスに乗る

「へいやー…… センぐーん……」

その一番後の席に座るとなのはお姉ちゃんは僕の膝枕で寝てしまつた

「おはよー、仙ちゃん」

「相変わらずこいつもなのはとべつたりね」

バスに乗り込んできたのはなのはお姉ちゃんのお友達の円村すずかさんとアリサ・バーニングスさん

「おはよー」

「なのはつてばじつしたの?」

「今日は珍しく早起きしていたんで、眠かったんだと思こます」

「なのはが早起き…… 明日は風かじりへ」

「やつぱつやつと思こます?」

流石はアコサセん、分かつてひつしゃる

「一人とも、それは酷こよ」

そして唯一の良心である、すずかさん

「こだけの話なんだが俺はこの一人を疑つてゐる

人柄とかではないんだけど、どうもこの一人……“きな臭い”

まあ、今のところ問題はなさそうだから構わないが

「いやいや、寝坊助のなのはが早起きよ?」

「そんな、たまにはそんなこともあるんじゃない?」

寝ているなのはお姉ちゃんを気遣つてか、前の席に座つた一人はそのままお姉ちゃんの早起きについての議論を交わし始めてしまつた。気づいたけど、バスの中で膝枕して寝るのって中々邪魔じゃないのか?

そう思わずにはいられない今日この頃だつた。

放課後、僕は家に帰つてきて夕飯を食べに高町家へと来ていた

「へえ、フレットが倒れていたんだ」

「やうなの、ちゃんと獣医さんのところに連れて行つてあげたの

偉いことしたんだから褒めて

と言いたいのか、じゅうじゅう頭を差し出してくるのはお姉ちゃん

だから僕は素直になのはお姉ちゃんの頭を撫でておく

ちなみに、今日はなのはお姉ちゃんが塾に行くために別れて下校していったのだ

いつもは一緒に帰ってるよ

夕飯を食べ終えてお風呂にまでお世話になつた

なのはお姉ちゃんと一緒にお風呂で遊びすぎて桃子さんに少し怒られちゃつたけど

そして家に帰り、のんびりした後

もつ寝よつと思いつ寝室へと向かつ

「ん？ あれは

「

窓の外

高町家から出てきた一人の人影

「ひんな時間になにやつてるんだね?」

出てきた人影の正体はなのはお姉ちゃん

なのはお姉ちゃんは辺りをキヨロキヨロとした後、ビニがく向かって走り出してしまった

「こんな時間に一人で外出なんて危ないなあ」

仕方ない、僕も付いていくか

「ふむ、見失った」

いや、そもそもなのはお姉ちゃんがビニに向かうかもわからなかつたのだし

家を出て、姿が見えなかつた時点で諦めるべきだつた

一応、捗してみたけど見つからなかつだし帰るか

そう思い近道である公園を抜けようとした時だつた

「…………え？」

恐る恐る下を向く

そこには僕の胸から突き出でこむ僕の血で濡れている腕だつた

意味がわからない

「『ハフツー！』

吐血する

引き抜かれる時に肉を引き摺り出される感覚が分かる

振り返る時に裏拳をする

放った裏拳は見事に俺の背後から胸を貫いたなにかに当たった

そう“なにか”に当たったのだ

僕は目を見開いて驚愕する

そこには黒い霧のような何かに包まれた、これまた黒い西洋の鎧を着た人のような“なにか”だったのだ

鎧を着ているように見えてその実、拳が当たった感触はまるで柔らかいマットを叩いた時のようだった。

「

ドンッと僕が3メートルほど吹き飛ぶほど強い力で押される

もちらん心臓付近を貫かれた僕は無惨にも地面に転がる

視界も霞んできた

「ぐう……！」

声も息をする音しか出なくなってしまった

体温が急激に低下していくのが分かる

つまりは 僕はここで死ぬと理解してしまう

訳も分からぬ奴にいきなり後ろから刺されて死んでしまうのだ

「ああ、本当に短い人生だった」

僕はそう呟いて、目を閉じた

あれ？

パチッと目を開けてみる

視界は霞んでいた筈なのにクリアだ

声はいつの間にか戻っている

体温も至って普通

なにが起きた？

僕は起き上がり思わず自分の身体をまじまじと見る

刺されたはずの胸は再生している

あれは実は夢だったのか？

だがそれは違うと断定できる

貫かれた部分の衣服は破けているし、なにより“なにか”は依然として先程と同じ位置に居た

「

」

“なにか”が戦闘態勢に入つたのが理解できる

ははは、こりゃまずい

なぜ俺は死なずに、傷が治つていいのかなどもはや考えている場合ではない

不思議と僕の思考は冷静であつた

しかし同時に今にもオーバーヒートするのではないかと思つぽどフル回転をしていた

まずは現状の把握だ

恐らく敵は一人、そして僕も一人

僕の身長は相手の腰ぐらい

攻撃力は今さつき味わつたばかり

速さも確実に向こうの方が上

逃走できる確率は間違いなく低い

なうば戦つ？

いやいや待て待て

たかだか僕は小学二年生だ

こんな化けもの相手になにが出来る？

逃げ切るという勝てる確率の低いギャンブルに挑戦もしてみたいけど僕が背を向けた瞬間、僕は殺されるだらつ

「ははは……これが絶対絶命つてやつか」

あと背水の陣だつけ？

まあ良こせ、逃げるくらくなら戦おつ

逃げて殺されるよりも僕は戦つて勝つ可能性に賭ける

僕はそう決意して構えをとる

身体を相手に対しても半身になり、左手は手の平が自分の身体とは逆のほうに捻り肘を曲げて顔の前、丁度アゴか頬の持つてくる

右腕は肘を曲げて、さながらガッシュポーズのような感じだ

両の拳は、ちゃんと第一関節だけ曲げが入差し指と中指だけは第一と第二関節を曲げて少しだけ突出せせる

僕は今日何度目かの驚愕をした

なぜこの構えにしたかは分からない

でも自然にこうこう構えをとつていた

そして構えをとつた瞬間、頭の中に『玖錠降神流』といつ単語が入つてくる

「は、ははは、なるほどね……そういうことか」

まるでパズルのように1ピースが埋まるごとに連鎖的に情報が流れてくる

「なるほどなるほど、理解した」

玖錠降神流

それが僕の使う武

そしてこの武があれば田の前の敵にも勝機はあるかもしれない

「！」

“なにか”が甲高く咆哮をあげる

いいね、やううか

そして僕は記憶の中から引きずり出してきた知識をもとに口を開いた

「今やうに雪降らめやも陽炎かげるいの燃ゆる春へと成りしにしものを

これが初戦闘、相手は未知数だし初っ端から本氣で行くのが最善だ
ろう

「？・摩利支曳娑婆訶

」

それはある種の瞬間自己催眠を意味するのか、唱え終わるとほぼ同時に仙の纏つていた気が変質していく

猛烈に、だが曖昧に、存在そのものがズレるような。まるで陽炎か蜃の夢。

一重、二重、三重、四重、五重
重なつていく彼のどれが本体なのか分からぬ。

否、もしかしたら、全てが本体なのではなかろうか。

多重身 玖錠の秘伝はそれだった。

だが少年は本来の正統派な玖錠流ではなく『至み』を宿していた

「さあ、行くぞ化け物！」

この日、少年の日常は非日常へと変わり、願いの叶つ宝石を求める物語の裏で行われていた物語が始まつたのだった。

第一幕（後書き）

感想をお待ちしております

そして同時に玖綻降神流の構え方の説明文も分かる方は教えていた
だきたいと思います

第一幕（前書き）

お久しぶりです、執筆と投稿が亀速度で申し訳ありません

とりあえずは第一幕です、どうぞ

第一幕

「……なんなのこれは？」

なのはははう咳いた

ジユエルシードを封印して、騒ぎを聞き付けた警察のパトカーのサインを聞いて慌てて家の近くの公園に逃げてきたのだがそこにはクレーターができていた

「一体なにがあつたの？」

時は三十分ほど前に遡る

深夜の公園では正真正銘の死闘が繰り広げられていた

黒いなにか……黒騎士は仙よりも先に仕掛けた

三メートルの距離を僅か0・2秒で詰める

仙はそれに合わせるように右の脚を上げる

黒騎士は急停止をして見事に上体を後ろに反らすことで回避をする

だがしかし回避をしたはずの黒騎士は鈍く大きな打撃音とともに反らした上体が前へと戻され、正中線に四連撃をおみまいさせられた

「！」

「!？」

致命傷ではないにしろ、決して軽くはない攻撃を浴びせられた黒騎士黒騎士に理性という物があるかは定かではないが、あるとしたら黒騎士は確実に驚愕していた

自分と戦おうとしてきた者だけでも珍しいのに

今までにみたことのない構え

硬気功で身体を強化し、貫気で一撃の威力も一般の成人男性を遥かに越えている

攻撃を放つ際の踏み込みでクレーターが出来たし

自分の腰辺りまでしかない身長の少年だが恐怖するに値する

さらには今の技

突如として後頭部からの衝撃で前に態勢が崩れ、四発も蹴られた

少年は一人だけのはず

なにかを仕掛けるようなことはさせていないし、していなかつた

ならばなにが起こつた？

「……………」

数舜の思考の末、黒騎士は身を翻した

「あ、待て！」

仙の言葉にも反応せずに黒騎士は夜の闇へと姿を消すのだった。

静寂

仙はしばらく固まっていたが完全に黒騎士が居なくなつたと分かると大きく息を吐いた

「…………生き延びた、か」

正確には一度死んでるけども

だが間違いなく今さつきまで僕は死地に居た

初めての修羅場

それを乗り越えることが出来た

そしてなにより

「玖錠降神流を手に入れた」

それが一番大きく、そして己がなんのかも理解してしまった

「はあ…………」りやあ他の人には言えないよなあ

ぽつつと呟いて仙は疲れたので自宅に帰ることにした

黒騎士の」ともあつ、それについて考えながら

そして、当初の田約を忘れながら

余談ではあるが家の前でようやく当初の田約を思い出したのだったりする

翌朝、少年は身体にのし掛かっている重みで田を覚ました

「はあはあ……ヤン君の寝顔つばほ可愛」の

田を覚ますとそこには寝ている僕の上の鼻息を荒くしてこむのはお姉ちゃんが居た

おおう?

しかもなんだかくねくねしているし

「ん、おまよひ

僕も朝は弱くて、よく一度寝あひながら流石のこの状況は田が覚める

「あ、おまよひのヤン君ー。」

お姉ちゃんは僕が目覚めたのが分かると押し倒すよつに抱きつくる

「むう、起き上がりない

「お姉ちゃんどこへよー」

「断固拒否するな

なんだと?」

そんなこんなで学校

お姉ちゃん達とは学年が違うので学校が終わるまではお昼休み以外はお別れだ

授業中、僕は先生の声をBGMにボーッと外を眺めていた

ふふふ、窓側の後ろから一番田といつ席をクジで勝ち取った僕の引き運を褒めてあげたい

つて、そんなことを考えるつもりはないんだつて

僕は外を眺めながら昨日のことを思い出していた

突如、僕のことを殺してきた 実際には一回殺されてるけど 謎の黒い騎士甲冑を着たアイツ

雰囲気でわかる、アレは人間じゃない

もつとこう別な、人間とはまた違った次元の生物

むしろ生物かもわからない

だが到底、機械には思えない動きだった

結果的に言えば奴に殺されたおかげで僕は『玖錠降神流』を使えるようになつたのだが

玖錠降神流……しかも僕の場合は陰の部分が強いせいで普通とは違う

強いて言つならばただの人間ではなくなつてしまつた

格闘技の世界チャンピオンと戦つても負ける気はしない

……いや、能力と氣で身体を強化すればの話しだよ？

なんにもなしでやつたらボコボコにされるのは間違いない

技能とかは今後、鍛えていくしかない

あの黒騎士がなんにしろ、今は鍛えよう

今後、アソシがまた来るかもしれないし、もしかしたら一人だけじゃないかもしね

今の自分に足りないのは経験だ

力や技はまだ補う方法がある

でも経験つていっても相手は人外レベルの相手だし、そう簡単に経験なんて積める訳がない

はあ……どうしよう?

そんな悩みを抱えながらの昼休み

僕はいつも通り、屋上へ『飯を食べに向かう

そして屋上への扉を開けると

「やつとセン君が来たの！！」

「……あつ、人外戦闘民族」

「にやー!?」

なにやら驚いている、なのはお姉ちゃん

そうだよ、なんで忘れていたんだ

身近に人外クラスの戦闘力を持つている高町家が居たじゃないか

決めた、帰つたらシローに頼んでみよう

「セン君！ 私は人外ではないよー！」

「うん大丈夫、いつも通りのなのはお姉ちゃんだよ

戦闘民族なのに唯一、戦闘に向いていない

こつまでもそんな彼女で居てほしき

「なぜだひつゝ、馬鹿にされてると悪いのは」

「氣のせいだよ、氣のせい」

危ない、バレるかと思つたよ

「はあ……なにが悲しくて毎日、昼休みにあんたらのイチャイチャを見なきゃいけないのかしら」

なのはお姉ちゃんの後ろの方からバーングスさんの声がした

丁度、なのはお姉ちゃんで見えないから気づかなかつた

「あれ、今日は円村さんはないの?」

「ちょっと先生に呼ばれてていないだけよ」

なんだ、やうか。

お腹も空いたけど円村さんが来てないならまだ食べる訳にもいかないな。

僕はなのはお姉ちゃんに抱きつかれながらアコサセの近くに寄る。

そしたら

「つー？」

瞬間、背筋が凍るような冷気が稻妻のように走った。

慌てて後ろを振り向く

しかしこには誰も居ない。

「どうしたのよ、仙？」

「顔色悪いけど大丈夫？」

「え……あ、うん」

心配そうにこちらを見てくる一人に僕は大丈夫と答える

今のは一体……

今の感覚、あの『黒騎士』と向かい合った時と同じ感覚だ。

「いや、気のせいだな」

無駄に気張り過ぎてるんだ、もづけっとリラックスせねば。

勘違いだと自分に言い聞かせ僕は月村さんを待つことにした。

この時、僕は貯水タンクの上から僕たちを見下ろす人物に気が付いて居なかつたのであつた。

「…………」

人影はそれからしばらく少年たちを見下ろして、姿を消したのであ
つた。

頑張るぞー！！

第三幕（前書き）

お久しぶりです

第三話です

では本編へどうぞ

第二幕

「ところが、相手になつてよシロー」

「ふむ、なにがどういう訳かわからんだが」

僕は学校が終わると急いで帰つてシローに会いに来た

「シローってすくへ強いんでしょう？ だから僕に稽古してくださいよ」

この時、士郎は惱んでいた

昔からこの少年のことは知つてゐるので、こうこう時の少年がなかなか退かないのも知つてゐる

「ちひとじては剣術を教えるつもりがないし、せひやつて少年を説得するか

「駄目だよ仙、ここで知つたか知らないが僕がやつてるのは剣道ではなく剣術だ。仙を疑つてゐる訳じゃないけど、危険だから教えるつもりは

「

「ああ、違うよシロー」

「なにがだい？」

「僕は別に剣術を教えてほしい訳じゃない

「僕は一拍だけ間を置いて言つ

「僕が教えて欲しいのは実戦だ」

そう言つた仙の瞳は決意を決めた者にしかできない、強い瞳であった

そのことにシローは思わず身をたじろぐ

「（なんという田だ。熱く、それでいて静かに、透き通るような綺麗で純粋な輝きを放つている）」

実の息子であり、自分の剣術の全てを教えてきた恭也がこのような瞳をてるぐらいに成長したのはいつぐらいだつただろ？

僅か数えで7歳の少年がこのよつた瞳を出来るだなんて……

「……一体、君になにがあつたんだい？」

だからこそ、そう聞かずにはいられなかつた。

今朝は時間的に会えなかつたために最後に仙と会つたのは昨日の晚だ

昨日の晩から今之間になかがつたのは間違いない

「……簡単だよ、僕は守りたい物（田常）があつて、今それが壊されるとかかもしれないんだ。それを壊されずに守りぬくためには力がいる、中途半端ではなくちゃんとした力がいるんだ」

「……しかし、実戦を教えるにしてもすく危険なんだつ！」

士郎は寸止めのつもりではあるが、当てるならば回避不可能なはずの速度で手刀を仙の首筋へと目掛けて放つ。

「つー」

しかし士郎の予想は大きく外れて、自分の手刀を仙は回避するどころかカウンターで自分の顎の真下に拳を持ってきていた。

「どう? これでも危険だつていうの?」

「…………」

士郎はそっと目を閉じて昔のこと思い出していた。

昔、あれは自分が大怪我をして生死の境を彷徨つていた頃の話だ。

一家の大黒柱である自分が居なくなつたことと、家族の心は荒んじ行つてしまつた。

桃子は翠屋の仕事に

恭也と美羽は剣術の修行で力を求め

そんな家族の為になのはは『良い子』にならなければならなかつた。

我儘も言いたかつただろ? う

でもそれは言えなかつた。

次第になのはは心を閉ざしてしまつた。

公園で一人で遊ぶ毎日

小学生にもなっていない子に、そんな風にさせるとは家族として凄く情けない話だ。

そんなんある日、なのはに友達が出来た。

一つ下の男の子

名前は鎧水 仙

一人だった日常が、一人になった。

それは小さいようで、すごく大きなこと

なのははそれから毎日、仙と遊ぶようになった。

向こうの家族も、こちらの家の事情を知っていたのかなのはを鎧水家に泊めてくれたことも何度もある。

聞こぞされかけたなのはの心を開いてくれたのは間違いなく仙だ。

まあ、そのことをすべて知ったのは僕が退院してからなのだが

初めて会った時の、あの幼かった仙が、今、こうして僕に決意を固めた目をして拳を向けてきている。

実の息子のようにも思っていた子だ。

この成長には感動を通り越して、畏怖の念さえも覚える。

よくぞここまで成長したな、仙

閉じていた目をそっと開けて士郎は口を開いた。

「……僕の修行は優しくないぞ?」

「上等!」

ニカツと笑う仙

ふふふ、本当に逞しく育つたものだ。

第三幕（後書き）

感想をお待ちしております

第四幕（前書き）

ヒトが死ねば

五話目です、ヒトが

第四幕

私はいつも一人だった

私はいつも暗い闇の中にいた

でもある日、私には一筋の光が差し込んで来たの

あれは今でもハツキリと鮮明に覚えている

その日、私はいつも通り一人で公園で遊んでいたの

家に居てもつまらないし、なにより家族の迷惑になる

あの家に私の居場所はない

そう思つと涙が出そうになる

だけど私はグッと堪える

もつ毎日同じことをやつてゐるのだ

堪えることには慣れてしまった

せつせつなにを作るかも決めていないのに砂を盛つていく

つまらないの

「ねえ、なに作つてゐるの?」

「ふえ？」

突然、上から声がして顔を上げるとそこには一人の男の子がいた
「ねえ、なに作ってるの？」

もう一度、同じように男の子は話しかけてくる
なにを作ってるつて……

「……別になにも」

なにを作るかななどと考えてもいな

ただ単に砂を盛っているだけだ

私は顔を俯かせて、また砂を盛り始めようとしたら

「へえ、じゃあ僕と一緒ににか作ろうよ

ドクンツ！

と心臓が跳ねるのが分かつた

「私と一緒に？」

「うん」

笑顔で肯定していく男の子

「……本当になのはと一緒に遊ぶの？」

今までなのはと誰も遊んでくれなかつた

だから信じきれなかつたからもつ一度、聞いてみた

すると男の子は声は出さなかつたけど確かにしつかつと頷いてくれた

それが凄く嬉しくて思わず泣いてしまつた

「どうしたの！ もしかして僕がなにかしちやつた…？」

泣き出した私を見て慌てる男の子

「ひ、ひん……違ひの、なんでもないの」

ただ嬉しくてつい泣にちゃつただけな

しばりくして私が落ち着くと男の子は笑顔で私に向かつて

「わあ、はやく遊ぼう！」

そう言つてきた

その日から私と男の子 鎌水仙は家がすぐ近かつたこともあつて毎日、一緒に遊んだ

時にまだ私の悩みとか考えを聞いてくれたし、仙くんも悩みや考えを話してくれた

私の全てを知っている仙くん

私だけを見てくれている仙くん

私だけのことを考えててくれている仙くん

あの一人の闇の中から助けてくれた仙くん

私には仙くん無しの生活だなんて考えられないし考えたくもない

仙くんの隣に居て良いのは私だけ

私の隣に居て良いのは仙くんだけ

だから私は仙くんを私から奪おうとする者あるいは仙に危害を及ぼす者を許さないの

「…………だから私は戦わなくちゃいけないの」

「なにがだから…？」 とつあえずはその包丁を離して落ち着いて！

！」

私は今、アリサちゃん達と学校から帰つてきみたら
くんを見つけた
道場の方からボコボコになつて足まで引き摺りながらやつてきた仙

その後ろにこまお父さんがいた

状況を見て確實にお父さんが仙くんをボコボコにしたのだろう

台所に向かい、包丁を手に取る

先程も言つた通り、仙くんに憎を仇なす奴は絶対に許さない

それが例えお父さんであつてもだ

「離してなの仙くん」

「なら包丁を下ろして！！」

丁度、包丁を手に持つた時に仙くんに捕まってしまった

ビーハビーボコボコにした相手を庇うのか意味が分からぬの
理由を聞いみると、ビーハビーボコにした仙くんが自分から修行を付けてほし
と頼んだらしこの

良かったの

仙くんがお父さんになにか弱みを握られてるとかじやなくて

でもなんで修行を付けてもらおうとしたのだろうか？

聞いてもなんか曖昧にしか答えてくれない

むう……眞になるの

でもここで無理矢理聞き出すのも仙くんから的好感度を下げてしま
うだけかもしないので聞かないでおく

とりあえず仙くんの傷を治療しなくちゃいけないの

待てよ、これはこれで仙くんのお世話をできるから良か
ったのではないか?

ついそう思つてしまつた私であった

第四幕（後書き）

さて、次はどうあるかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4950y/>

魔法少女リリカルなのは～魔王に愛されし少年～

2011年11月29日23時45分発行